独立行政法人国際交流基金

心連心
Heart to Heart

第15期

日本語国際センターにて

心連心：中国高校生長期招へい事業

報告書

令和5(2023)年9月ー令和6(2024)年7月

目次

はじめに …… 3

事業紹介 …… 4

生徒名簿 …… 5

思い出のアルバム …… 6

15期生のエッセイ紹介 …… 12

第15期生に聞きました！ …… 22

帰国を前に －作文集－ …… 24

短歌 …… 42

第15期生を受け入れて …… 44

心連心：中国高校生長期招へい事業

第15期 報告書

はじめに

「心連心：中国高校生長期招へい事業」15期生９名は、この度10か月間の留学期間を無事終了し、7月に帰国しました。2020～2022年度の3年間はコロナ禍により事業休止を余儀なくされましたが、皆様のお力添えのもと、2023年度に当基金の組織改編による新体制の中で再開することができました。また、全国7都道県での留学期間中は、受入校の先生や生徒の皆様、寮の関係者の方々、ホストファミリーとして留学生を受け入れてくださったご家族をはじめとする地域の皆様の温かいご支援により、一人ひとりがそれぞれ貴重な経験を重ねることができました。ここに心より厚く御礼申し上げます。

2023年9月の来日当初、生活習慣の違いに戸惑うこともあった15期生は、日を追うごとに日本にもすっかり慣れ、高校生活を楽しむ姿に頼もしさも感じました。勉強や課外活動、地域での交流等を通じて日本社会への理解を深め、文化や習慣の違いや慣れない環境での困難の中で考え、悩み、成長し、今では心を通わせる友人もできました。この報告書は、第15期生が過ごしたかけがえのない一日一日の様子を記録したものです。ぜひご一読いただければ幸いです。

「心連心：中国高校生長期招へい事業」の卒業生は、第15期生を含めると累計451名にのぼります。2024年4月現在、卒業生のうち半数を超える251名が再び来日し、日本の大学・大学院に進学したり、就職し社会人となって活躍しています。また、日本、中国に限らず世界中で「日中両国の架け橋になる」という思いをもって積極的に行動する卒業生の姿を見ることは、我々にとっても大きな喜びです。

当基金ではこれからも日中両国の青少年が心と心を結びあい、絆を深めながらともに成長して行けるよう、努力を重ねて参ります。引き続き皆様の温かいご支援、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

独立行政法人国際交流基金
国際対話部長　山本　雅子

「心連心：中国高校生長期招へい事業」とは

「心連心：中国高校生長期招へい事業」は、未来志向の日中関係を築く礎としての、より深い青少年交流を実現させるため、日中両政府の合意に基づき、国際交流基金、中国教育部（中国教育国際交流協会）の共催事業として、2006年に開始されました。本事業では「心と心をつなぐ」をモットーに、「心連心」というプログラム名称を用いています。

本事業は、中国の高校生が日本に滞在し、その生活を通して日本の社会や文化についての理解を深めるだけでなく、同時に日本の高校生が、中国の高校生との交流によって、異文化に興味を持ち、相互理解の大切さを学ぶ機会を提供しています。また、国際相互交流を通じて、日中の若い世代の心と心を結びあい、両国の長期的な関係発展の基礎となる信頼関係を築くことを目指しています。

2023年度は、中国各地から選ばれた第15期生９名が９月26日に来日し、日本各地の高等学校に通いながら、様々な活動を通じて日本の高校生やホストファミリーとの絆を深めました。

実施概要（第15期）

期間	2023年９月26日（火）～2024年７月19日（金）
招へい生徒	全９名（女子６名、男子３名） 遼寧省、天津市、山東省、上海市、河南省、四川省より来日
国内受入地	北海道、埼玉県、東京都、愛知県、長崎県、大分県、鹿児島県

「心連心：中国高校生長期招へい事業」第15期生名簿

No.	氏名	性別	出身校	受入校	都道府県
1	李（リ） 青陽（セイヨウ）	女	東北育才外国語学校	酪農学園大学附属 とわの森三愛高等学校	北海道
2	孫（ソン） 瀾歌（ランカ）	男	東北育才外国語学校	立命館慶祥中学校・高等学校	北海道
3	劉（リュウ） 斯恬（シテン）	女	東北育才外国語学校	埼玉県立蕨高等学校	埼玉県
4	王（オウ） 嘉隆（カリュウ）	男	天津外国語大学附属外国語学校	東京学芸大学附属 国際中等教育学校	東京都
5	董（トウ） 易文（エキブン）	女	洛陽外国語学校	桜丘高等学校	愛知県
6	王（オウ） 子芸（シゲイ）	女	済南外国語学校	聖カタリナ学園 光ヶ丘女子高等学校	愛知県
7	翁（オウ） 月瑩（ゲツエイ）	女	上海市甘泉外国語中学	活水高等学校	長崎県
8	沈（チン） 瑞麟（ズイリン）	男	東北育才学校	岩田中学校・高等学校	大分県
9	朱（シュ） 語晨（ゴシン）	女	成都外国語学校	神村学園高等部	鹿児島県

思い出のアルバム

来日研修 in 東京

2023年
9月26日－9月30日

2023年9月26日、第15期生9名が羽田空港に降り立ちました。これから約10ヶ月の留学生活に先立ち、それぞれが生活する地へ出発する前に、4泊5日の「来日研修」を実施しました。日本で生活していく上でのルールやマナーなどの生活指導、地震等自然災害に備えた防災訓練を受けました。「来日歓迎レセプション」では、一人ひとりが日本語で自己紹介と留学生活の抱負を発表しました。レセプションの翌日、受入校の先生方に付き添われ、それぞれの生活地に向けて旅立ち、留学生活が始まりました。

心連心ウェブサイトからも来日研修の様子をご覧ください
https://xinlianxin.jpf.go.jp/tv/choki15_01/

北京を出発

羽田空港に到着

研修

外務省表敬訪問

中国大使館表敬訪問

防災館で震災体験

防災館で消火体験

国際交流基金訪問

対面式

来日歓迎レセプション

思い出のアルバム

3ヶ月目研修

in 埼玉・神奈川

2023年
12月5日−12月9日

来日から3ヶ月目になる2023年12月、埼玉県にある国際交流基金日本語国際センターにて「3ヶ月目研修」を行いました。来日後2～ 3ヶ月目は、留学生にとって悩みや問題に直面しやすい時期を迎えます。生徒それぞれの 悩みを同期生同士で共有し合い、その問題の背景にある原因及び解決方法・対策案を探りました。さらに、心連心プログラムで日本に来た目的・使命をもう一度思い出し、3ヶ月間で頑張ったこと、成長できたこと、できなかったことを振り返り、これからの留学生活をより充実させるために、目標の立て直しを行いました。

また、和太鼓で日本文化体験をしたり、神奈川県の鎌倉・江の島・横浜を訪れフィールドワークを行いました。それぞれの生活地で留学生活をスタートさせた同期生が集い、日本語の上達や精神面で成長し始めた姿にお互いに大いに刺激をうけたようです。

心連心ウェブサイトからも3ヶ月目研修の様子をご覧ください
https://xinlianxin.jpf.go.jp/current-student/005/

思い出のアルバム

6ヶ月目研修 in 大阪

2024年
3月28日−3月30日

来日から約半年が経った2024年3月後半に、国際交流基金関西国際センターで「6ヶ月目研修」を行いました。研修の目的は心連心プログラムで日本に来た当初の目的・目標を思い出すこと、そして6ヶ月間の留学生活を振り返り、残りの留学生活をより充実させるための目標の再設定です。

研修初日のフィールドワークでは、事前に作成した行程表をもとに、公共交通機関を利用し大阪の街を散策し、2日目のワークでは、「半年間の振り返り・反省」及び「友達作り」、「留学生活後半の目標の再設定」を行いました。また、自分たちで企画・準備した「お花見パーティー」も行い、百人一首や心連心留学の思い出ビンゴゲーム、などを行いました。

研修3日目には、8名の心連心の卒業生が合流し、卒業生交流会を開催しました。

心連心ウェブサイトからも6ヶ月目研修の様子をご覧ください
https://xinlianxin.jpf.go.jp/information/533/

思い出のアルバム

帰国前研修 in 東京

2024年
7月16日－7月19日

2023年9月に来日し、約10ヶ月の留学生活を終えた第15期生は、2024年7月19日、無事に帰国の日を迎えました。帰国前研修では、それぞれが日本各地で学んだことや感じたことを留学の総括として発表し、楽しいことだけでなく、辛いこと、苦しいこともたくさん経験してきた彼らは、来日時と比べて見違えるほど成長し、堂々とした姿を披露しました。また、研修の一環として、首都圏外郭放水路見学、東京大学キャンパスツアー、短歌ワークショップなどを行い、将来への考えを深めました。

帰国前日の「帰国前報告会」では、部活動や学校行事、ホストファミリーとの思い出など、日本での留学生活で自らの感性で感じ、学んだことを流暢な日本語で発表しました。報告会の最後には、全員に修了証書が手渡され、みな達成感に満ちた晴れやかな表情を見せてくれました。

第15期生の留学生活はこれで終わりになりますが、彼らにとってはここからが始まりです。この10ヶ月で得た経験を糧に、将来の夢に向かって一所懸命に努力し、日中友好の架け橋として大きく羽ばたいてくれることを心から願っています。

心連心ウェブサイトからも帰国前研修の様子をご覧ください
https://xinlianxin.jpf.go.jp/network/interview/071/

東大赤門

首都圏外郭放水路

浅草雷門

短歌セミナー

帰国前報告会

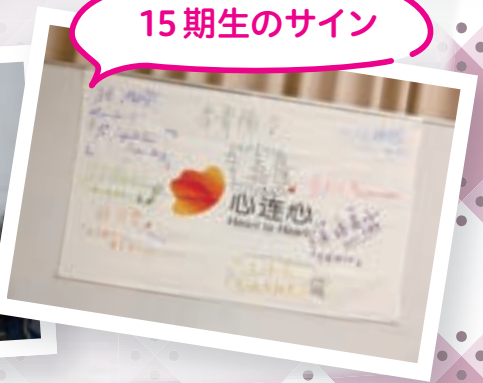
修了証が授与されました

みんなで歌を披露しました

帰国前レセプション

15期生のサイン

帰国前羽田空港で！



15期生のエッセイ紹介

翁　月瑩　日本の高校の一日 …… 13

王　子芸　私の日本語勉強法 …… 14

劉　斯恬　私の好きな日本語「大丈夫」 …… 15

孫　瀾歌　私の好きな日本語「何必日利」 …… 16

王　嘉隆　日中の高校生活の違い（給食＆お弁当） …… 17

董　易文　日中の高校生活の違い（寮生活） …… 18

沈　瑞麟　日本で初めての冬（大分） …… 19

朱　語晨　部活動で学んだこと …… 20

李　青陽　私の好きな日本語「あいづち」 …… 21

日本の高校の一日 ―留学生活は私の宝物―

翁　月瑩さん（長崎県）

日本に来てから１ヶ月が経ち、日本の高校生活を体験し、中国との違いを楽しみつつ、新鮮さに溢れる１ヶ月でした。これから日本の高校の一日について紹介します。

毎朝７時、舎監の先生がラジオでみんなを起こしてくれます。中国では家から学校に通っていたので、早朝６時には起きていましたが、今は毎日十分な睡眠が取れて、とても幸せです。朝の支度を済ませたら、８時頃に寮を出ます。学校に着き、授業が始まる前に特別な行事があります。それは礼拝です。私の学校はキリスト教の学校で、毎朝礼拝が行われます。オルガンの音とともに全校生徒がチャペルに集まり、讃美歌を歌います。その雰囲気に心が癒されます。そして、先生がお話しをします。先生からの言葉で新しく気づいた事がたくさんあります。

礼拝が終わると、授業が昼まで続きます。昼食はほとんどの生徒は家からお弁当を持ってきますが、食堂で買うこともできます。机を組み合わせてみんなでおしゃべりしながら楽しく昼食を取ります。

午後の授業後は、皆で教室を掃除します。ラジオの音楽に合わせて床を掃いたり、窓を拭いたりするのは、やる気が出ます。16 時頃に終礼し下校しますが、多くの生徒は自習をしたり、部活に行ったりします。私は少し自習してから弓道部に行き、18 時半まで練習します。部活後は寮に戻り、晩ご飯を食べたり課題をしたりします。22 時に寮のみんなで晩祷をして一日を締めくくります。

毎日繰り返しているような日常ですが、私にとってはかけがえのない思い出です。留学を通して、このような感覚がより深まりました。
例えば、私は毎日の礼拝から、キリスト教という異なる文化を理解し、新しい考え方や発見がありをもたらしました。また、午後の授業後に、クラス全員で掃除するのも新しい体験です。掃除を通して、クラスメート同士の絆が深まり、みんなが笑顔で教室をきれいにすることも、教育の一つだと分かりました。このような異文化体験が留学の日々にたくさんあります。

このような日々の生活は、地味に見えますが、実は無限の宝物が詰まっていると思います。小さな経験ひとつひとつが、異なる文化の独特な魅力を感じさせてくれます。これらの日常こそ、私にとってかけがえのない、大切な思い出だと思います。

私の日本語勉強法 －教科書では学べないこと－

王　子芸さん（愛知県）

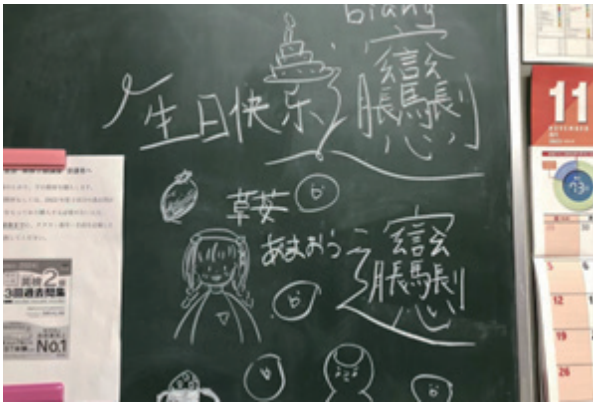
日本に来て２ヶ月以上になりますが、時間の経つのがとても速く感じます。

初めて学校に行った時、クラスメイトが普段話している日本語は中国の教科書で習った日本語ととても違うことに気づきました。最初の頃、クラスメイトとの交流ではずっと丁寧な言い方をしていたのを覚えていますが、友達にそんなに（堅苦しく）話さなくてもいいと言われました。そして、友達との会話は簡単な言葉でできるようになり、親近感を覚えました。

クラスメイトは中国語にとても興味を持っていたので、私は黒板に中国語を書いて読み方を教えました。クラスメイトも私に日本語でなんと言うか教えてくれました。友達と交流するのはとても楽しいです。

ホストファミリーと食事をしたとき、その日食べたものの日本語での名前を教えてもらい、新しい単語や日常用語をたくさん学びました。ホストファミリーの家族が日本の文化を丁寧に説明してくれるので、とても温かい気持ちになりました。

日本人にとって中国語の発音は難しいですが、みんなが頑張って話すのを見て、自分が留学生であることにやりがいを感じました。私も皆さんと中日の文化を交流する時、教科書では学べないことをたくさん学んでいます。



私の好きな日本語「大丈夫」

劉　斯恬さん（埼玉県）

日本での留学中に私が特に気に入った日本語は「大丈夫」です。

「丈夫」という言葉は、日本語では健康や頑強さを意味しますが、
日常会話では「大丈夫」は主に「問題ない」や気遣いを表現する際に使われます。

他人の提案を断る時、直接的に否定するよりも「大丈夫」のような言葉を使うと、会話がスムーズに進みます。例えば、コンビニでレシートが必要かたずねられた時、不要な場合には「いいえ」と言う代わりに「大丈夫です」と答えます。

これは日本語の言語体系における婉曲表現を表していますが、この婉曲表現が時に誤解を招くこともあります。

また、人を気遣ったり慰めたりする時には、「大丈夫ですか？」や「大丈夫？」というフレーズがよく使われます。

例えば、クラスメイトが病気になった時には、翌朝に「大丈夫？」とたずねたり、試験に失敗した時には「大丈夫だ」と慰めることがあります。

「大丈夫」は、日本語の言語体系や文化の一端を表しているに過ぎませんが、それは確かに日本人の細やかな心配りを反映しています。

私の好きな日本語「何必日利」

孫　瀾歌さん（北海道）

好きな外国語のフレーズを話題にする時、最もその言語らしい表現を思い浮かべることは誰にでもよくあります。
たとえば、美しいフランス語であれば “J’aime” で、「愛している」という意味です。
また、中国全土で流行した韓国ドラマでは、多くの女性主役が口にする「오빠」（お兄さん）に思い至るかもしれません。
日本語であれば、「かわいい」や「大好き」のような、有名アニメ作品で頻繁に登場する言葉や、「国士無双」や「井戸端会議」といった日常生活で使われる表現を選ぶ人もいるでしょう。
しかし、私のように独自の道を選ぶタイプの人は、一般的とは言えず、現代の多くの日本人にとっても見慣れない次のような漢文の一節を選ぶのです。
「王、何必曰利、亦有仁義而矣。」
この文は「王、何ぞ必ずしも利と曰はん。亦た仁義有るのみ。」と読みます。
中国人が日本で、日本語の古文を用いて古代中国語を語る。
一見しただけで人の心をざわつかせるような言葉は、私の現状を如実に反映しています。
このようにして、私は伝統文化への情熱と文化間の交流を再発見しました。
中国での学校生活の中でも特に好きだった国語の授業で、私が最も苦手だったのは文語文（古代中国語）でした。
当時の私にとって、この簡潔だが難解な言語をなぜ学ばなければならないのか、試験に出してまでこのような文章を中心に深堀りしていく理由がわかりませんでした。

天邪鬼な性格の私はそんなことを気にせず、現代小説や小論文で高い点数を取っていたのとは対照的に、文語文の成績はそれほど良くありませんでした。
日本に来る一か月前には、Bilibili 動画で日本語の古文を少し勉強し、日本でスムーズに授業を進めることができるようにしようとしました。
しかし予想外だったのは、最初の古文の授業で困惑したのは「源氏物語」や「万葉集」といった日本語の古典ではなく、中国の教科書で学んだばかりの「鴻門の会」だったということです。
訓点、書き下ろし文、異なる語順、見慣れているが、異質の漢字。
探求を続ける中で、新しい言語で母国語を学ぶおもしろさに徐々に目覚めていきました。異なる発音、異なる記憶方法、そして異なる文化背景から生まれる異なる理解方法。
たとえば、漢文の翻訳では、臣下は君主に対して敬語を使わなければなりません。
「糟糠之妻」で、光武帝が宋公に言った‘谚言，“贵易交，富易妻。”人情乎。
という言葉は、現代日本語では「諺の中には、『高い身分になったら交友関係を変え、富を得たら妻を変える』というものがある。（これは）人として当然の考えではないか。」と訳されます。
すぐにわかることは、光武帝は敬体ではなく常体で終始話しているということです。
それに対し、宋公は‘臣闻，“贫家之交不可忘，糟糠之妻不下堂。”’と答えています。現代日本語では「私は『貧しく身分が低かったときの交友関係は忘れてはならない。貧しい生活を共にしてきた妻を家から追い出してはならない。』と聞いています」と訳されます。
臣下の回答は敬体を用いています。
この点は、中国の学生にとってはしばしば見過ごされがちです。
無数の細かい違いの中で、日中両国の似て非なる文化が私に新たな視点をもたらしました。
何千年もの影響と衝突の結果が私の目の前で徐々に展開されていくことに魅了されました。文化間交流の中で、私は小さな存在とはいえ、体験者の一人として存在しています。
そのため、少々大げさかもしれませんが、日中文化交流に自分なりの貢献をしたと言えるのかもしれません。

日中高校生活の違い（給食&お弁当）

王　嘉隆さん（東京都）

私は高校留学生として、中国と日本の日常生活の違いを深く感じている。その中でも、特に顕著なのは昼食の扱いだ。中国では、学校が給食を提供するのが一般的ですが、留学先では、生徒はお弁当を持参することが一般的だ。このような異なる昼食文化は、両国の食文化や生活様式を反映するだけでなく、背後の文化の違いも反映している。

中国の高校では、食堂は生徒が日々の食事を摂る重要な場所だ。ここでは手頃な価格で様々な家庭料理が提供され、生徒たちは午前の授業が終わると早速昼休みを楽しむために食堂に駆け込む。列に並びながら友達と会話を楽しみ、待つ間に自分の好みに合った料理を選ぶ。また、食事の際には、生徒は食堂でゆっくりと食事を楽しむ一方で、早く終わらせて運動や勉強などの活動に参加することもある。

日本の高校は中国の学校と異なり、通常、食堂は設置されていないため、生徒は自分で昼食を準備する。これは日本で「お弁当」と呼ばれている。これらのお弁当は通常、学生の両親が用意し、または朝、学生が自分で用意する。昼食時間には、生徒は教室や校庭などで友達と一緒に昼食を取る。お弁当を広げ、お互いのおかずを交換したり、会話を楽しんだりすることが一般的だ。男子生徒たちは昼食時間になると、お弁当を持ち寄りながら一緒にゲームを楽しむことがある。気軽に対戦し、協力プレイを楽しむことに熱中する光景が見られる。

昼休みは日本と中国どちらも一日の中で最も楽しい時間であり、生徒は自分の趣味や興味に合わせて自由に過ごすことができる。一部の生徒は図書館や自習室で勉強をする一方で、他のグループは校内で遊んだり、友達と交流を深めたりする。昼休みは生徒にとってリフレッシュする時間であり、体力と精神的なリフレッシュの両方を得る機会だ。

中国と日本の学校の給食制度を詳しく考えると、それらが背後に持つ社会的な価値観を探求できる。中国の学校の制度は通常、集団主義と社会的責任感を反映しており、食堂は生徒が一緒に食事をする場所としてだけでなく、生徒たちの団結と社会的な共同体の概念を強調している。これは中国の伝統的な文化の中で「人は一つの心であり、心は道に従う」という価値観を反映しており、個人の利益よりも集団の利益を重視する考え方を強調していると思う。

それに対し、日本の学校制度は個人の自律性と責任感をより強調している。生徒は自分でお昼ご飯を準備する必要があり、これは日本社会が個人の自主性を重視していることを反映しているのではないか。日本の学校では、生徒たちが自分の行動に責任を持つことが教育されており、学業や日常生活のことを自分で管理する必要がある。そのため、昼休みは自己管理や社会的な交流の機会として重要だ。生徒たちは交流を通じて相互尊重と理解を学び、これらの価値観は彼らの日常生活や思考にも反映されている。

このように、学校の制度の違いは、両国の異なる社会文化や価値観を反映している。中国は集団主義と社会的責任感を重視していますが、日本は個人の自主性と責任感を強調している。そして、これらの違いは生徒たちの日常生活や交流の中で明確に表れている。

異なる文化の日常生活を比較することは、私たちの視野を広げ、相互理解を深めるための貴重な機会だ。留学生活を通じて、私は中国と日本の両方の高校生活のユニークな側面を発見し、それぞれの文化の違いに対する理解を深めることができた。そして、これらの違いは私の人生において貴重な経験となり、相互尊重と文化交流の大切さを再認識することができた。

日中の高校生活の違い（寮生活）

董　易文さん（愛知県）

来日後、日中両国の違いをとても深く感じています。そこで今日は、中国と日本の寮生活の違いについて紹介します！

私の中国の高校はとても厳しい高校で、いろいろなルールがあります。毎朝 5 時 45 分、部屋の電気はつけて、5 時 50 分になると、寮母さんが起こしに来ます。このように毎日の学習生活が始まります。授業が終わり夜になると自習があります。みんなと一緒に 22 時 10 分まで勉強して、寮に戻ります。

中国の高校ではスマホ禁止のルールがあるので、部屋に帰ったあとはおしゃべりが一番の楽しみです。学校の寮はすべて 6 人部屋なので、毎日話しきれないほど話題がいろいろあります。でも遅すぎる時間まで話してはいけません。寮母さんに怒られます。おしゃべりの他にも、いろいろなおもしろいこともあります。

例えば、友達の誕生日では、自習が終わったら、みんなで彼女の部屋に集まり、誕生日の歌を歌って、プレゼントを渡します。その時は歌声がちょっと大きいので、寮母さんに注意されてしまいました。意外だったことに、寮母さんは理解を示してくれたので、私たちと一緒に彼女の誕生日を祝ってくださいました。私たちにとって本当に特別な夜でした。

でも日本の寮生活は中国と全然違います。例えば、目覚まし時計を自分でセットする必要がありますし、一人部屋と二人部屋が多く、スマホは大丈夫ですし、いろいろな違いがあります。なので最初日本の寮に入って、すぐ感じられたのは「自由」です。しかし自由とは自分の自律能力を高めることを意味します。だから、最初はすぐには慣れませんでした。しかし、寮母さんと寮の友達は辛抱強く私に多くのことを教えてくれて、私も徐々に適応しました。本当にありがたいです。一番印象に残ったのは、クリスマスのときのことだと思います。あの時、掃除が終わった後で、みんな集まって、チョコケーキを食べて、クリスマス写真を撮りました。本当に楽しかったです。私にとってとても大切な思い出です。

とにかく寮だけでも、日中両国の違いを感じることができます。同時に、これらの違いを探す時、私はとても面白いです。日本の高校寮で滞在するこの 10 ヶ月は、忘れられない、いい思い出になります。そして、この 10 ヶ月の経験は私に自立能力を高める機会となり、人生の次の難関を乗り越えるのに役立つと信じています。

日本で初めての冬（大分）

沈　瑞麟さん（大分県）

大分の冬はあまり寒くないと思います。

「もうすぐに三ヶ月が過ぎます。」ある朝突然、この事を意識しましたが、まだ夢のように、毎日楽しく、充実した生活を過ごしています。そして今、私が確かに成長したことが実感しました。

夕明りが大好きな私は、いつも川辺に散歩します。水が穏やかに流れ、川面が明るくなり、これを見ると嫌な気持ちもすぐになくなります。これは私の小さい幸福です。

１２月、大分県は寒くなりました。しかし、先生から聞いたことは、今年は以前より暖かいそうです。私は中国の東北地方に住んでいますから、ここは中国より暖かいです。しかし、１０月に比べて、とても寒いです。よく考えてみると、ここが寒い理由は海風が強いからかもしれません。

寒いのは天気だけです。その他全ては暖かいです。

「沈くん、おはようございます！」「今日も部活頑張ったな、すごい。」「数学本当に上手だ。」「日本語ペラペラですね。」これは私の日常です。天気は寒くなりましたが、友達や先生方がいつも私に手伝ってくれて、毎日毎日にこの新しい環境に適応している私を励ましてもらいます。皆さんの暖かさをもらっているので、どんなに悪い天気でも寒さを感じません。

月がある夜に、どんなに逞しい人でも、実家のことを思います。暁月の夜に月を見ていた私は、懐かしい感情が溢れてしまいました。故郷の絆も心の中で温かさになった私は、これからも家族の期待を背負って頑張ります。

毎日夕焼けを返照する大分川が、もう記憶中の光華になりました。

日本で初めての冬は、意外に「暖かい」です。

部活動で学んだこと

朱　語晨さん（鹿児島県）

私は日本の高校に来て、すぐ弓道部に入りました。

中学生の時、「ツルネ」というアニメを見てから、ずっと弓道に憧れていました。そのアニメに出会ってから、自分が弓道場に立って、矢を放つ瞬間の爽やかな後ろ姿を何度も想像してみました。だから、部活を選んだ時も迷わず弓道部に入りました。

でも、現実はそんなに甘くはありませんでした。最初の三ヶ月間ほどは弓を持つことができませんでした。代わりにゴムキュウという物を使って練習をしていました。弓が使えない時期は全く「弓道」をやっている実感がありませんでした。練習が呆気なく感じ、少しイライラしてきた頃に、先生が弓を使った練習を始めさせてくれました。

弓を引く練習を始めてから、だんだんゴムキュウを使う練習の意味を理解してきました。腕に力を込めると同時に射形を作る。弓の練習が始めたばかりは、あまりこの動作が上手くできずに、悩んでいました。自分の力だけで上達させることは難しいと感じたため、部活の仲間にアドバイスを貰ました。一緒に矢取りに行ったり、道場の片付けをしたりもしました。それから、弓道は一人で取り組む武道ではないことを知りました。皆で一生懸命、練習を頑張っている弓道部の雰囲気が大好きです。

いつの間にか弓を使った練習にも少しずつ慣れてきました。しかし、的前に立って、弓を引き、矢を放つ瞬間はとても緊張してしまいます。入場する時に、頭が真っ白になってしまい、どうしても矢を的に届けることができません。何回も引いて、大勢の経験者にコツを伺っても、思った通りにいきません。自信も無くしてしまい、弓道場に入ることが怖くなってしまいました。しかし、周りにいる仲間は私が落ち込んでいることに気づき、声を掛け、「弓道は、練習すればするほど、進歩できる武道なんだよ。今も十分頑張っているから、あまり焦らなくてもいいよ。」と慰めてくれました。

そのとおり、弓道には色々な学問が含まれています。たてせんは必ず真っ直ぐになるとか、肘は崩れたら駄目だとか、まとに当てたい欲望ばかり先に立つと合わなくなってしまうとか、たくさん心がけなくてはならないことがあります。私は今も弓道をやりながら、自分の品性と人間性を磨いています。

私の好きな日本語「あいづち」

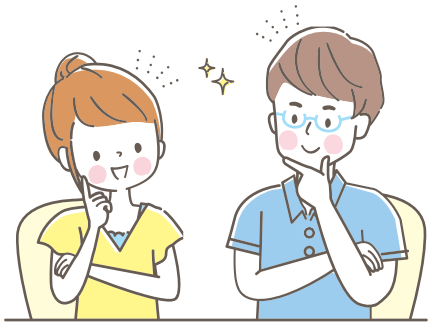
李　青陽さん（北海道）

日本側生徒との交流と対話を通して、私は日本の「あいづち」文化が徐々に分かってきました。

「あいづち」は、中国語の「附和」に近い意味で、もともとは 2 人の鍛冶職人が交互に鉄を叩くことを指し、密接に協力する様子を表しています。

聞き手は簡単なあいづちを打つことで話し手に応答し、自分が真剣に聞いていること、話題に興味があること、または話し手の意見を肯定していることを示します。

私は、「あいづち」が日本人のコミュニケーションの習慣に溶け込んでいることに気づきました。



留学生である私の日本語表現はまだ硬く、言葉遣いが適切でないために誤解されないかと心配することもあります。

しかし、日本側生徒と交流すると、彼らはいつもあいづちを打って自分が理解していることを示し、話し続けるよう私を励ましてくれます。

このようなコミュニケーションのマナーのおかげで、私は温かさ、安心感を感じ、自信を持つことができ、もっとコミュニケーションを取りたいと思わせてくれます。

中国語の「嗯」や「哦」といった語気助詞も同意を示しますが、日本語ではやや場当たり的に聞こえることがあるため、「あいづち」を学ぶことは非常に重要です。

例えば、「なるほど」、「たしかに」、そして万能の「そう」（そうだね、そうなんだ、そういうこと等）といったあいづちは、多くの具体的な情報を伝えるわけではないにしても、会話の潤滑油になります。何より、他人を励ますことは美徳なのです。

第15期生に聞きました！

日本で10か月をすごした
15期生たちに色々質問してみました！

Question このプログラムに参加してよかったことは何ですか？

- 知らなかった文化をに触れたり、新しいことに挑戦したりして、毎日の成長を感じた。
- 様々なことを経験して非常にうれしい。
- 成長して、親に頼らず、自分の面倒を見ることができました。
- この1年で得たものは、知識よりも、人との付き合い方、知らない環境でどう生きていくか、どうコミュニケーションをとっていくか、どう自分で自分の面倒をみるかということで、これらはこの先ずっと役に立つと思います。
- この留学生活の中で、私は色々なことが体験できて、どんどん成長しました。
- 日本に来て一年間勉強して、日本語がとても上達したと感じると同時に、自立性も鍛えられて、とても成長したと感じます。
- 日本人と友情を築くことができました。
- 異文化を良く理解しましたが,とてもいい友達をできましたから,色々な活動も参加しました。生活も充実でした。
- よく異文化交流できました。

Question 日本での生活で自分がどういうふうに成長しましたか？

- 人あしらいが上手になって、曖昧な言い方や他人の立場を理解できるようになった。芸術（バイオリン、ピアノ、絵、ダンスなど）に興味を持っているので、頑張って上達できた。
- 掃除、自炊など様々な向こうでやらないことを自分でして、生活能力が向上し、1人での生活を通じて独立性も向上した。
- 新しい環境に溶け込むコツを身につけました。
- 新しいクラス、新しい学校、新しい社会、新しい国でいかに溶け込むか、知らない環境で、如何にコミュニケーションをとり、生活し、自分のリズムを整えて適応していくか、また、その環境で、自分を確立するかということを学びました。
- 一人で寮で生活していましたから、自立能力も前より大きく成長しました。
- 一人で異国にいて、言葉が通じなかったり、文化が違ったり、いろいろな問題にぶつかったりしましたが、自分で手探りしながら一歩一歩解決していったので、今でも最初にぶつかった問題を思い出して「なんでもなかったんだ」と思えるようになったのは、自分の成長だと思います。
- 自立性が高まり、自分の感情をコントロールすることもできるようになりました。
- 生活は自立になりました,そして友達を作る能力も良くなりました。環境についての適応能力も伸びました。
- 自立しました。自分の財務管理をできるようになりました。人間性を高めました。

Question

日本に来て一番嬉しかったこと、感動したことは何でしょうか？

- ホストファミリーのお父さんは三国志に詳しくて、何時間でずっと三国志と中国史の話をしてた。本当に嬉しかった！三国志について、そんなにおしゃべりできる中国人も珍しいから。
- 体育の授業でみんなと一緒にスキーに行ったが私はそれがなかなか苦手で、みんなに助けてもらって非常に感動した。
- 体育祭。声を尽くして、応援したりしました。全力で綱引きを引いて、一勝一敗で、惜しかったんですが、いろいろ素晴らしい思い出が出ました。
- 学校の体育祭で全校の4組が共に頑張って優勝を取ったこと。
- 部活のみんなと一緒に合宿に行って、夜ご飯を食べて、夜遅くまで喋って、本当に嬉しかったです。
- 四月末の球技大会が一番の思い出で、試合前にみんなで練習したり、応援の掛け声を作ったりしました。試合の時、うちのクラスはとてもいい成績を出して、学年で一番になって、そのあと先生との試合で、先生のチームも倒しました。友達と抱き合って、「私たちが一番だ」と言っている場面は一生覚えているでしょう。
- ホストファミリーに好きな食べ物を聞かれたとき、火鍋だと答えました。すると、ホストファミリーのお母さんが中国の火鍋の素を買ってきて、作ってくれました。日本で買うのは難しいはずなのに、私が何気なく言ったことを覚えていてくれたことに感動しました。それが幸せな思い出となりました。
- 学校の体育祭で皆応援して騎馬戦をやりました。
- 弓道部の仲間と一緒に大会に出ました。

Question

今回の留学で学んだことや帰国を迎えて感じることを漢字一文字で表すとしたら？

夢

・以前の私が思わなかったことが現実できて、今の私にとっても夢みたいなことだった。留学を通じて将来の目標や夢が明確になることもできた。

・日本に来てからの1年間が夢のようで、このプロジェクトに選ばれた時も夢のようで信じられなかった。たくさんのことを学んで、たくさんの友達ができて、夢のように楽しかった。

・日本の高校生の生活を体験してみたいといつも思っていた。今回の留学でその夢が叶えてくれた。10ヶ月でこの夢が覚めてしまいますが、夢で出会った人、経験したことはいつまでも忘れません。

スタッフコメント：なんと複数の15期生が「夢」の字を選んでくれました。皆それぞれの夢に近づいたようでよかったです。

新

・読み方は心（SHIN）と同じ。この１０ヶ月間、新しいことを体験して、新しい自分になった。帰国したら、新しい姿勢で頑張ります！

清

・自分の本心をはっきり見て、1人での生活を経た後前の困難もそんなに大変ではないと思うようになって、心も清らかとなった。

実

・充実した日々を送り、実際の日本を体験しながら、毎日着実に努力を重ね、実りある成果を得ることができました！

別

・「異なる」という意味で、日本は中国とぜんぜん違う国なので「別」で表したい。「お別れ」の意味として、今そろそろ帰国なので、日本と別れ、留学生活と別れ、日本の友達と別れの意味を表したい。

爽

・すごく楽しい時間を過ごした。もう本当に帰りたくない。ここの生活は幸せすぎて、私の気持ちを伝わるように「爽」は一番適宜だと思う。

桃源郷の雪

酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校／東北育才外国語学校
李 青陽
Li Qingyang

一年前のある夜、教科書を閉じた時、ふと桃源郷に隠居したいという妙な気持ちになった。桃源郷は農耕文化のユートピアで、21 世紀の強欲や焦りもなく、戦火や環境汚染もない。畑も肥えるし、人々ものどかな生活を送っている理想的な存在だ。北海道で桃源郷の影を見つけるとは当時思わなかったが、10 ヶ月の留学生活を通して、雪の舞い落ちている桃源郷が心に浮かんできた。

それでは、「桃源郷記」という漢文の抜粋を引用しながら、北海道の印象を振り返ってみよう。

復タ行クコト数十歩、豁然トシテ開朗ナリ。土地平曠ニシテ、屋舎儼然タリ。
復(ま)た行くこと数十歩、豁然(かつぜん)として開朗(かいろう)なり。土地平曠(へいこう)にして、屋舎儼然(おくしゃげんぜん)たり。
さらに数十歩行くと、急に目の前が開けて明るくなった。土地は平らに開けて、建物はきちんと並んでいる。
有二リ良田・美池・桑竹之属一。阡陌交ハリ通ジ、鶏犬相聞コユ。
良田(りょうでん)・美池(びち)・桑竹(そうちく)の属(ぞく)有(あ)り。阡陌交(せんぱくまじ)はり通(つう)じ、鶏犬(けいけんあい)相聞(き)こゆ。
良い田畑・美しい池・桑や竹のたぐいがある。田畑のあぜ道が縦横に通じ、鶏や犬の鳴き声があちこちから聞こえる。

東京から江別に来ると、まさに「開けて明るくなった」のだ。広い田野もあれば、深い原始林もあり、緑が溢れた。都会で生まれたわたしは、野生の鹿や狐をはじめて見た時、大変驚いた。雪に覆われた丘が素晴らしいスキー場となった時、スキー遠足を楽しんだ。桜が咲き乱れた時、美瑛へ出かけて花見を体験した。北海道の森と畑は静かで広大で、桃源郷と似ていると感じた。

周りの日本人は老若男女を問わず、いつもニコニコしている。日本人の高校生も中国に対して好奇心に満ちていて、挨拶したり、おもしろい質問をしたりする。三国志から一人っ子政策に至るまで、当たり前と思っていた中国を自分がまだよくわかっていないのに気づいた一方、日本の本当の様子も分かってきた。

このような質問と回答のやり取りが、相互理解に導く道だと思う。お世話になった友達、先生、ホストファミリーの皆さんに感謝します！

会話だけではなく、日本のお祭りや学校行事も体験した。クリスマスのお菓子作り、お正月の初詣、雪祭りの氷彫刻、ひな祭りの人形、それから沖縄への修学旅行、音楽部の発表会、強歩遠足、学校祭…このような初めての体験は一生忘れがたい思い出になった。和やかで自由なライフスタイルを象徴する桃源郷は、私の留学生活のようだ。新しい景色や風習を味わって、異文化体験して、バイオリンやピアノを弾いて、好きな本を読んで…今日は昨日の繰り返しではなく、新しいサプライズなのだ。なぜかというと、心のままにできるからだ。

青春は一度きりなので、もう一度日本へ戻っても、この 10 ヶ月の気持ちを取り戻すことができない。つまり、桃源郷に帰ることができないのだ。だが、桃源郷を探すかわりに、自分で桃源郷を築くことにした。桃源郷の核心は他人との友愛、自然との調和であり、これには国境や文化の壁を越えて心を繋がなければならない。だから、好奇心や柔軟な考え方を持って、文化交流を続けたい。北海道の雪は、いつまでも私の心の桃源郷に舞い続けていくでしょう。

音楽部

強歩遠足で、26 キロ歩いた

旭川の青い池

先生の誕生日のサプライズ

昼休みの楽しい会話

修学旅行で行った沖縄の植物園

江別市の異文化交流イベントに参加した

茶道体験

北海道の雪はすごいね

ホストファミリーと月見

人間ノ歳月ハ何ゾ匆々タルヤ

立命館慶祥中学校・高等学校／東北育才外国語学校
孫　瀾歌
Sun Lange

日本に来た後、中国で長い間勉強していなかった文言文（日本語では漢文）を久しぶりに勉強した。それをきっかけに、古典への興味がだんだん出てきて、私もそれを使って日本人のクラスメートと話し始めた。

この帰国前作文を作成している時は真夜中で、明日の古文のテストのために復習した後、パソコンを開いて、文字を一つずつタイピングしている。書いていると日本へ来たばかりの時、初めての古典の授業で『鴻門の宴』という文章を読んだ時の驚きが頭に浮かんだ。中国で好きではない古代の文章は日本でも授業の一環として日本人の学生も勉強している。そのことは、赤に染められた楓と一緒に私を驚かせた。

9ヶ月を経て、今は『去来抄』を勉強している。授業の前にみんなと一緒に芭蕉について討議し、外をちらっと見ると、もう緑の世界となっていた。

秋、冬、春、それに他の地域より遅い北海道の夏も間も無く来る。季節の流れと一緒に、私の日本での高校生活も間も無く終わる。来たばかりの嬉しさ、来日1ヶ月後の気持ちの落ち込み、JLPT の勉強、白石寮でのみんなとの生活、私にとって極めて困難な体育、それに冬の雪とスキー、春の桜と鳥、夏の暑さと雨からなる私の留学の世界も、しばしの終点に歩き着いた。初めの頃、私は「これからどのぐらい時間をかけたら帰れるか」と毎日チェックして、「時間が早く過ぎるように」と願った。中国農暦の新年の時も両親とのビデオ通話が終わった後、涙が気づかないうちに目から流れた。その時も、毎日勉強して、他のものも無視して、そうしたら早く帰れるだろうと幻想した。

しかし、ある日 Youtube で古典を勉強していた時「人間歳月何匆匆」という漢詩が目の前に出てきた。それは、「生きている時そんなに忙しく生活する必要はない」という大意である。確かに、私が中国で高校に通っていた時、毎日厳しいスケジュールがあって、自分にとっての思考の時間もなく、「もし暇な時間があれば何をしようか」とよく考えていた。しかし、日本に来た後、フリータイムがたくさんあって、部活、勉強、好きであれば恋愛さえもできると発見した。本当のことを言うと、この違いを必ずしも嫉まないとは言えないだろう。

そうだね。そんなに忙しくする必要はないね。もし時間が戻せるなら、冬休みにホストファミリーともっと話せばいいね、退職した政経の先生ともっと話したらいいね、友達と一緒に遊びに行ったらいいね。しかし、その時の私は「明日テストがあるから出かけないほうがいい」「恥ずかしいから話さないほうがいい」と思っていたが、今からすると、自分に「後悔の薬がない」としか言えなくなった。

今の私も 16 日のテストに向けて勉強をしている。オンラインの塾もあって、日曜日でもあまり出かけられなくなった。しかし、今の私にとっては、後悔という気持ちは何もない。それはテストの勉強でも、現在の私にとっては「匆々」ではないと思うからだ。

初めの楓、楓に覆われた豪雪、豪雪のように落ちた桜、桜にともなって生まれた緑葉、それは必ず私の「人間歳月」である。しかし、友達との時間と、勉強にかかった精力も、私の「人間歳月」ではないか？ それなら、日本での毎分、毎秒は全て私の「歳月」だと思う。

日本から間も無く離れる今、私は意外に気持ちが穏やかである。寂しさもあるが、そこでの記憶はもう私の一部となっている。自然、友達、先生及び学校も、私の頭に鮮明な痕跡を刻んだ。これからの生活は、どんな困難にあっても、「何も知らずに日本人の高校生と一緒に勉強する」ということより難しい状況もないだろう。だから、そんなに忙しくせずに、これからの「人間歳月」を、「匆々」無しに、愛を込めて周りを気にかけながら未来へ歩こう！

学校の芸術鑑賞で行った劇場

春の教室の風景

アイヌの服装体験

札幌伏見稲荷大社で

アシリベツの滝

茶道体験

札幌室内水族館のペンギン

スキーの授業

ホストファミリーと迎えた新年

自分で作ったエビ餃子

日本とのつながり

埼玉県立蕨高等学校／東北育才外国語学校
劉　斯恬
Liu SiTian

北京を離れる時、興奮と不安の気持ちが混ざり合いました。未知の国での新しい生活が始まる期待と、故郷を離れる寂しさが入り混じった瞬間でした。

日本に着いた瞬間、見た目はまるで中国国内にいるかのような感覚で、周りの人もアジア人で、友達も全員そばにいるようでした。楽しい 5 日間の研修があっという間に終わり、一人の冒険が始まりました。

学校に着いて緑色のパンフレットを受け取りました。中には新しいクラスメイトが書いたメッセージがあり、それを読むことで孤独感が和らぎました。先生方も、わからないことや授業の内容を丁寧に説明してくださり、本当に感謝しています。遅く帰宅しても、ホームステイ先のお母さんがいつも熱々の食事を用意してくださり、まるで家族がそばにいるような安心感があります。ホームステイ先の家族とは、花火大会に行ったり、みかん狩りを楽しんだり、クリスマスには一緒にケーキを作ったりと、毎日が非常に充実していました。さらに、学校行事も様々あり、強歩大会では友達を応援し、体育祭では全力で綱引きをし、打ち上げではみんなで話しながら乾杯するなど、忘れられない思い出がたくさんできました。

「物事は順風満帆ではない」ということを痛感しました。授業で日本語がわからなくて焦ったり、通学時間が長すぎて辛く感じたり、友達が作れなくて孤独感が溢れたりしました。先輩や心の通う先生、学校の先生に相談しながら、トラブルを乗り越えられるように頑張りました。また、部活では料理部と演劇部に所属しています。料理部で自分で作った団子や花寿司を作りながら話し合ったり、演劇部で一緒に脚本を作って、動画を撮ったりと、心に残る思い出がたくさんできました。

文化交流といったら、中国語授業や文化交流会に参加しました。授業の中で、中国語の言語知識だけでなく、中国の文化や生活様式についても紹介しました。生徒たちと日本の文化や日常生活についても共有し、お互いに学び合うことができました。文化交流会では、オーストラリア出身の男の子や日本人の高校生との交流を通じて、自分の国以外の常識や生活様式についても学びました。

最初の心連心の面接で、「一番好きな言葉は何ですか」と聞かれた時、繋がりと答えました。なぜなら、繋がりは人間と人間の交流を表しており、社会も個人も不可欠なものだからです。心連心のおかげで、日本との、世界との繋がりを作ることができました。

異国での交換留学が終わり、新たな旅が始まります。この先の未来にも、数え切れないほどの日本との繋がりが待っているでしょう。

登校初日にクラスメイトにもらったパンフレット

花火大会

川越まつり

強歩大会

誕生日のお菓子パーティー

初日の出と富士山

海

学校で作った団子

学校で動画撮影

中国語の授業

イチョウの木と共に過ごした留学生活

東京学芸大学附属国際中等教育学校／天津外国語大学附属外国語学校
王　嘉隆
Wang Jialong

月日が矢の如く過ぎ去り、10 か月の留学生活がそろそろ終わろうとしている。留学生活を振り返ると、日本で多くのことを学び、いろいろ忘れられない経験をし、自分が一回り成長できたことを、今、実感している。

最初日本に到着したときの気持ちは、まだ心に残っている。初めての登校日、全く知らない学校、全く知らない教室の前に立って、心拍数は上がり、手のひらに汗をかいた。窓の外の濃い緑のイチョウの木を一目見て、深く息を吸い込み、見知らぬ教室に足を踏み入れ、私の日本での留学生活が始まった。

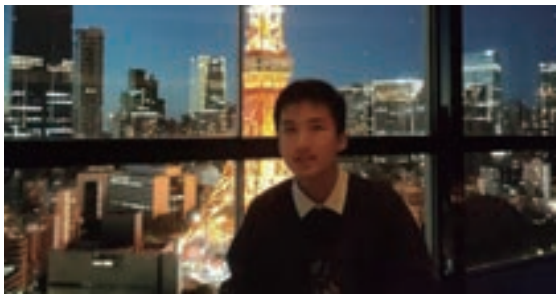
生まれて初めての日本でのホームステイ、留学生活は、私にとって全て新鮮だった。毎日が新しい発見で満ちていた。以前中国でスマホの画面でしか見たことがなかった東京の景色が、私の目の前に広がった時の驚きやワクワクした気持ちは言葉では言い表せない。 日本語はあまり上手くなくても、毎日元気いっぱいで友達と先生と笑顔で挨拶を交わし、たとえ授業がわからなくても、クラスの友達が助けてくれた、こんなふうにして、私とみんなと仲良くなった。

しかし、現実は厳しかった。やっぱり日本語で全ての授業を受けるのは難しい。日本語で書く課題も難しい。ある日、窓の外の金色のイチョウの木を見ていた時、中国を愛しく思った。年始は学校行事で学年のみんなと長野県へスキーに行った。その修了式で、私は勇気を出して立候補し、生徒代表としてスキー指導をしてくださった先生方にお礼の言葉を日本語で述べた。発表が終わってみんなからの拍手喝采と称賛の言葉を受けた時、自信と留学への熱意を取り戻したように感じた。

窓の外にだんだん新緑に染まっていくイチョウの木を見ながら、残る留学生活を悔いなく、楽しく過ごす決意を新たにした。高校二年生に進級し、自信を持って学校生活に取り組み、多くのことにチャレンジすることにした。委員会や部活動に積極的に参加したのはもちろん、その中でも私は特に頑張ったのは体育祭の応援団メンバーとしての活動である。まさにこれらの活動や絆のおかげで、私と友達の友情がより深まって、みんなと本当の友達になれ、別れがたい。瞬く間に、窓の外のイチョウの木が生い茂り、また濃い緑になり、留学生活も終わりに近づいている。

この 10 か月間、私はさまざまな挑戦に立ち向かい、成長し、貴重な友情を築いてきた。今までの経験を胸に刻み、皆への感謝の気持ちを抱きながら進んでいきたいと思う。今後の新たな挑戦に対する自信と勇気を持ち、未来に向かって前進する。

早稲田文化祭



初東京タワー

運動会の応援団旗作り

打ち上げ後のドンキ

運動会の時の私

運動会のクラス集合写真

応援団の集合写真

応援団旗を振ってた私

友達と一緒に食べた油そば

バスケ部集合写真

キミたちへの話

桜丘高等学校／洛陽外国語学校
董　易文
Dong Yiwen

“ 初めまして!これからよろしくお願いします! ”

2023年9月26日、簡単な挨拶から、私の留学生活は始まりました。初めて登校したときの緊 張感は今でも忘れられません。見知らぬ街に来て、見知らぬ顔に出会い、私は好奇心で胸がいっぱいになると同時に、不安も深く感じました。その時私は日本語があまり上手ではなく、言いたいことをすぐに伝えることができませんでしたが、キミたちはいつも私の話を最後まで辛抱強く聞いてくれました。そのおかげで、私はもっと日本語を話す勇気を持つことができました。

2023年10月25日、私は部活に入りました。来日前に想像していなかったこと は、和太鼓部に入ったことです。これは一番正しい選択だと思っています。以前和太鼓について知っていたのは「太鼓の達人」というゲームだけでしたが、部活動に入ってから、和太鼓の魅力を深く理解しました。一方で、私にとって和太鼓は全く新しい体験のため、色々なチャレンジが必要でした 。入部当初、先生の指示がよくわからないことが多々ありまし たが、キミたち（部員のみんな）はいつも積極的に私に説明してくれました。公演の場所が分からない時に、キミたちは私を連れて行ってくれました。初めての曲を練習する時に、キミたちは辛抱強く教えてくれました。ここで、私は本当に中国で体験できないことを体験することが出来ました。そ して、私はここで生涯の友達を作りました。和太鼓部に入って、本当に良かったです!

2023年10月31日、ハロウィンの時、キミたち（クラスメイト）が親切にお菓子を分けてくれたことを今でも覚えています。その時、私は深く感動しました。それは私にとって初めてのハロウィンであり、きっと一番忘れられないハロウィンでもあるでしょう。当時の私は毎日ホームシックに悩んでいましたが、キミたちの存在があったおかげで、徐々に日本の高校生活に慣れました。ハロウィンだけでなく、その後の日々もキミたちと一緒に色々なことを体験して、私もその中で少しずつ成長し、貴重な経験をたくさん積むことができました。これも私にとって、一生忘れられない思い出になりました。

2023年12月28日、私は初めてホームステイに行きました。そして、キミたち（ホストファミリー）と色々なことを経験しました。教科書でしか見たことのない場面が現実になり、ちょ っと不思議だと思いました。異国で新年を迎えるのは初めてですが、キミたちがそばにいたから、寂しさは感じませんでした。カラオケ、たこ焼きパーティー、ビンゴ大会、初詣、初日の出。これらの大切な思い出は決して忘れられません、そして、忘れたくないです。本当にありがとうございました!

2024年7月16日は帰国する日です。人間の一生は短いもので、その中で青春がもっと短いです。この短い青春でキミたちに会えて、本当に幸せだと思っています。もしチャンスがあれば、私はきっと未来のいつか、またキミに会います。その時には、お互いに大声で名前を叫びましょう!

“ お久しぶり、お元気ですか? ”

ホストファミリーと見た初日の出

中国語の授業

ハロウィン

部活の合宿

クラスの友達

部活の後

吉田城の前で友達と

初めてのゲームセンター

クラス写真

学校の前で

真夏の花火

聖カタリナ学園光ヶ丘女子高等学校／済南外国語学校
王　子芸
Wang Ziyi

この 10 か月の留学生活は一生懐かしいと思います。私にとって今回の留学経験は快適圏から離れて、未知な国で自立的に暮らすことや勉強すること、そして問題に直面して解決することを通じて成長しました。これらすべてがより冷静かつ勇気ある自己像へ導いてくれたのです。

学校のパンフレットを見るのは初めてでしたが、皆さんはきちんとした制服を着用し、にこやかな表情であり、学校の雰囲気がとても気に入りました。肌寒くなるにつれて、風が爽やかに吹いてきます。学校に到着すると友達たちは研修旅行の準備をしており、私たちの目的地は長崎です。長崎原爆資料館を訪れ自ら歴史を目撃した時の衝撃は言葉では表現しきれません。その後数日間グループ活動で多くの有名な場所へ行きました。今回の旅行で歴史の勉強ができただけでなく、心配事もたくさんなくなり、友達もできて、新しい話題もたくさんできました。留学生活を研修旅行から始めることは非常に良い経験だったと思います。

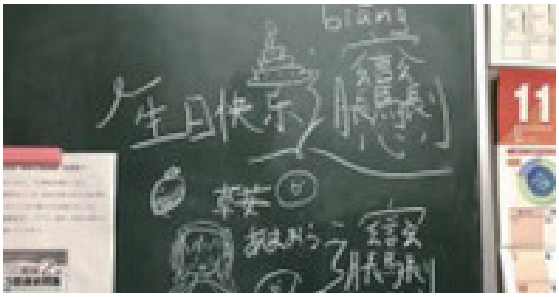
11 月に私はホストファミリーに入居しました。幸いなことにホストファミリーのお母さんは中国人でした。先生から聞いてとても安心しました。そして私の三ヶ月間のホストファミリー生活をとても楽しみにしていました。ホームステイの中に妹が一人いて、私達は同じ学校で、彼女は吹奏楽部の部員で、毎日早く出て遅く帰ってくる生活は本当に大変で、同時に心の中も多くの尊敬を生みました。12 月にホストファミリーのお父さんとお母さんは私を連れて海を見に行って、そんなに広大で明るくて、初めて海岸線のそばに立って、海風に吹いて、カモメが頭の上を飛んでいくのを見て、中国国内でこれまで経験したことがない体験で、今までになくリラックスして楽しいと感じました。

冬休みを迎え、岡崎市でも雪が降りました。ホストファミリーみんなでスキーに行こうと言われました。お母さんはそれが家庭の特殊な伝統だと言いました。お正月は「長野県」で過ごしました。曲がりくねった山道で、世界が真っ白になるのを見ながら、家族みんなでスキーに行ったり、お正月料理を食べたりしました。人生で初めてのスキーで、冷たい風をさえぎる厚いスノースーツを着て、重いスノーシューズを履き、妹と私の歩き方がペンギンのようでかわいいとホストママに言われました。スキーが終わった後、私と妹は一緒に抱き合って暖を取りました。二人が凍った赤い鼻とお互いに暖を取る手を見ています。本当に家族のようです。これは私が過ごした最も特別で暖かい冬でした。

春休みが終わって暖かくなり、満開の桜の下で三年生になりました。私は新しいクラスに移り、新しいクラスメートと知り合いました。そして、勉強の雰囲気が急に緊張してきて、授業がだんだん難しくなってきました。いよいよ暑さが厳しくなり、帰国も近づいてきましたが、春の一番の思い出といえば、やはり五月末の球技大会です。私たちのクラスのすべての人はとても一生懸命にバレーボールを練習して、私にとって初めてのバレーボールの試合に参加しました。みんなでたくさん写真を撮りましたし、私のクラスは学年で一番の成績を取りました。最後のボールが落ちた時、クラス全員が抱き合って、「私たちが一番だ」と叫んだ、あの場面は一生覚えているでしょう。私も高校生活がそんなに青春で熱いものなのかと初めて感じました。みんなで一つの目標に向かって頑張っている姿は美しいなと思いました。

真夏といえば日本の伝統的な花火大会が思い浮かびます。実際に見ることはできませんが、花火のように美しく、花火のように短い年だと思います。人生の道のりでは、こ の 1 年は取るに足りないようで、しかしまたとても忘れ難い 1 年です。これも私の人生の中で咲いた花火だと思います。

お花見で見た綺麗な桜



クラスメートに中国語を教えた

茶道

クリスマスカード

クリスマスを祝ってホストママが作ってくれた豪華料理

ホストファミリーと海を見た

剣道部

写真部

バレンタインデーのお菓子つくり

京都

夢が日常に

活水高等学校／上海市甘泉外国語中学
翁　月瑩
Weng Yueying

「一日だけでもいいから、日本の高校生になってみたいな。」と、二年前の私が、アニメのシーンを見ながら呟いた。そんな夢がいつか叶うなんて考えもしなかった。

10ヶ月間、私は活水高等学校の一員として、長崎で留学生活を送った。

飛行機が着陸した瞬間、私は目の前の景色に驚いた。上海とは全然違って、この美しい港町は、海に囲まれ、自然に恵まれた素晴らしい場所だ。毎日、カーテンを開くと、まるでジブリの世界にいるようで、山に浮かぶ雲と夕焼けを見るのが大好きだった。

不安を抱えながら学校に入った時の気持ちは、今でも覚えている。どうしたらみんなにいい印象を残せるだろうと思いながら、自己紹介の原稿を頭の中で何度も繰り返した。幸いなことで、クラスのみんなは私にあたたかく接してくれた。

そして、初めての礼拝に参加した。活水はキリスト教の学校で、毎朝チャペルで礼拝が行われている。印象的なオルガンの音、みんなの天使のような讃美歌を歌う声、すべてが礼拝の魅力だった。私はそこからキリスト教に興味を持ち、活水の教育を通して、キリスト教についてたくさん知った。

日本の部活に憧れていた私は、弓道部に入部した。最初は全然中らなかったのに、とても楽しく感じた。道場に立ち、弓を打ち起こした時、すべてを忘れられて、心が落ち着く。行き詰まりもあったが、弓道部で知り合ったたくさんの友達と支えあい、みんなで大会に出たり、合宿に行ったり、悔しい時に一緒に泣いたり、勝った時に一緒に笑ったり…。宝のような思い出がたくさんあった。

そんな毎日が繰り返し、友達との絆も深まった。日本で親友を作るのは、最初、難しいことだと思っていた。言語や文化の壁があり、きっと日本人みたいに接してもらうのは無理だと思っていた。しかし、そんなことはなかった。夏祭り、観光、合宿、発表会、球技大会、修学旅行など、私たちはさまざまなことを一緒に過ごした。困難があったらともにに乗り越え、喜びを分かち合った。「また日本に来たら絶対会おうね」「私たちはずっ友だから」そんな声を聞いて、私は感動してたまらなかった。

年末年始と春休み、私は日本の家庭でホームステイもした。家族の雰囲気があたたかくて、みんなは私を本当の家族かのように接してくれた。「つきちゃんがいないのが不思議に思う」私が寮に戻った後、そんなメッセージが届いて、うれしかった。長い間家族に会っていない私にとって、ホームステイは、私のホームシックの解消にもなった。気づいたら、彼らは私の中ではもう「ホームステイ先」ではなく、本当の家族になった。

そんな日々の中で、私は時々その生活に慣れて、「つまらないな」「疲れたな」、と思ってしまう時もあった。しかし、この生活は私の夢だった、この生活に憧れていた私を思い出すと、この大切な時間を無駄にしたくないという無限な力が湧いてくる。

「日々私たちが過ごしている日常は、実は奇跡の連続かもしれない。」この言葉を忘れずに、長崎で出会った一人一人、出来事の一つ一つを忘れずに、未来の毎日を過ごしたい。

友達と夏祭り

クリスマスの雰囲気

ホームステイ体験

英語発表会終わり

ホストファミリーとタコ焼き

弓道大会で団体 2 位！

弓道大会

豪華なおせち料理

クラス全員の写真

友達と観光

霽日

岩田中学校・高等学校／東北育才学校
沈　瑞麟
Shen Ruilin

霽日の意味は、雨の後の晴れた日です。

春雨が降り続けています。でも最近が意識しましたが 、もう夏になりました。今降っている雨はもう春雨ではありません。日本で初めての春があっという間に終わりました。よくわかりませんが、私の心は少し空っぽになりました。

私は元々雨が好きではありませんが、今は雨に特別な感情を抱いています。なぜなら、煙雨でも、豪雨でも、それはいつか止むからです。

この十ヶ月間、私はいつも雨の子を呼ばれていました。体育祭は雨でした。遠足は雨でした。お花見に行きたかったのですが、天気予報を見たら雨でした。普通に隣の神宮に参拝しても途中で雨が降りました。その結果、体育祭は丸1日の予定でしたが、午前だけになってしまいました。遠足はキャンセルされました。お花見もできませんでした。他の人から見ると、大切な活動の時はずっと雨でした。それはもちろん残念です。

天気を変えられないけど、私にできることは、いつでも心を晴れやかに保つことだけです。それは、外はどれだけ雨が降っても、私の心はずっと晴れです。つまり、楽観的に困難に直面することです。それは私がこの十ヶ月間に学んだことです。

霽日を期待する気持ちを持っていれば、雨でも晴れのように暖かく感じられます。

私は学校の応援団に入りました。予定では体育祭で午前と午後に演舞しますが、雨のせいで午前中に全部をやりました。でも、雨が降る中で演舞したことは意外に格好よかったです。遠足には行けませんでしたが、クラスのみんなと一緒に教室でお菓子と昼ごはんを食べました。それは他の人には体験できないことです。この視点から見ると、私は意外に幸運でした。

この斜陽の下で暮雨を見て、傘を持って河岸に歩きながら、小さい波紋が立つ大分川を見たら、幸福感が溢れました。

辞書で調べたら、霽という漢字には二つの意味があります。その一つは「雨後の晴れた日」です。そして、もう一つは「爽やか、心がさっぱりする」です。

「心がさっぱりする。」こういうことはいつでもできることではありません。過去を振り返って、私は周りの人から色々助けをもらいました。それで私は色々な困難を乗り越えられたと言っても過言ではありません。ホストファミリー、寮生とクラスメート達、学校と心連心の先生達、バスケ部と応援団のみんなに感謝の気持ちを持っています。

夏の雨は、春より強くなりました。それとともに、別れの悲しさもだんだん強烈になりました。それは仕方ないです。もう、新環境に適応する時期ではありません。一緒に学園祭を準備したいのに。人間は感情に左右される生き物ですね。

晴れた日に泣くのが雨なのかはわかりませんが、これほど暖かい雨に降られたことはありません。

心がさっぱりしました。皆さんのおかげで、私はこの暖かさを感じました。もう遺憾が残っていません。霽日が来ました。これからこの十ヶ月間のことを思い出したら、私はきっと笑って、「あの時、楽しかったな」と言うでしょう。

「夕焼けを返照する大分川が、もう記憶中の光華になりました。」それは私が12月の感想文に書いたことです。では、今もう一つ追加します。それは「皆さんの笑顔が、心の霽日になりました。」です。

北九州小倉城

別府地獄めぐり

団長さんと

温泉から上がった友達とレストランで

箱根

応援団が終わった、ホームステイの妹と一緒に写真を撮った

応援団のみんな

友達と大分川を散歩

クリスマスパーティー

ホームステイの弟と

繋がり

神村学園高等部／成都外国語学校
朱　語晨
Zhu Yuchen

瞳の奥に映っているのは鮮やかで深い緑、これは私が鹿児島空港に着いた時、最初に見た景色だ。先生が車で迎えに来てくださった。先生と一緒に学校に向かう途中、私は窓ガラス越しに沿道の風景を見て、これからの学校生活に期待した。

学校での生活は本当に楽しかった。特に部活動は私の高校生活の支えになった。私は部活動で色々な思い出を作った。一番印象深いのは、弓道部に入ったばかりの時、部員達と一緒に伊集院という町にある神社に行ったことだ。その祭りで、初めて弓道の試合を見学して、美味しいかき氷としんこ団子を食べた。独特の味は今でも味蕾に残っている。

部活動の練習は毎日充実していた。部室の弓道場はすごく不思議なところだ。そこに立つだけで、心がゆっくり穏やかになっていく。弓を引いて、矢を一本ずつ放つ時、まるで精神が磨かれるように感じたものだ。弓道の競技は孤軍奮闘ではない。五人団体で「立」をする時、お互いのリズムを合わせて、交響曲を演奏するかのように、みんなの心がひとつになる。弓道もチームワークが大切なスポーツであるということを痛感した。

部活動を通して、より一層親睦を深め、一本の矢のように一心同体になる。これこそ弓道の本質だ。私はそれを身をもって感じることができた。そして、見事にチームワークを発揮できたことを心から誇りに思っている。

部活の仲間が私に団結を教えてくれた。でも、より多くの日本文化を体験させてくれ、人情を教えてくれたのはホストファミリーの沼田さんだ。ホストファミリーのおかげで、私は日本の絶景をいっぱい楽しんだ。ホストファミリーは歴史の長い神社、美しい海浜公園、賑やかなお祭りなど多くの場所に連れて行ってくれた。 彼らの人に対する情熱と思いやりに影響されて、私は人間関係で重要な思いやりを教わった。私たちは一緒にお正月に御節料理を食べたり、初日の出を見たりした。一緒にテレビ番組を見て大笑いしたり、私の日本での生活について話したシーンも決して忘れない。そして、私にとってもっと印象的なのは、ホストママのおいしい料理だ。ホームステイ先では、毎日の夕食が私の最も楽しみな時間だ。ホストママの料理がテーブルに上がるたびに、私はいつもすぐに食べ終わっていた。

部活の仲間とホストファミリーだけではなく、学校の先生や友達ともいっぱい思い出を作った。日本のみんなから教えて貰った最も大切なことは他人への思いやりだ。それまで私は自分のことばかり考えて行動したが、ここの友達に出会ってからは、彼女達の周りの人への行き届いた配慮に感動した。私もこれからは周りの人達を支えられるように頑張って行きたい。

鹿児島空港到着時はダウンコートを着ていた。いつの間にか季節は夏へ、気がついたら、私の十か月間の留学生活はもうすぐ終わりだ。留学は本質的に異文化交流である。私にとっても、私を受け入れてくださった留学先にとっても、いずれも大きな挑戦だったのではないだろうか。沢山の優しさで応援してくれた留学先の皆さんに心から感謝している。

この留学生活は私の青春の物語で極めて貴重な一章に間違いない。

弓道大会の団体戦に出ました

日本で初めて友達と映画を見に行きました

友達とカフェ巡りをしました

ホームステイ先で食べたおせち料理

ホストファミリーと見た初日の出

文化祭

弓道部のみんなといったお祭り

お祭りで食べたしんこ団子

観覧車と桜島

鹿児島の黒豚肉うどん

短歌

短歌ワークショップ

長くて短い10か月を31字に落とし込みました。
心連心の経験は一体何だったのか、研ぎ澄まして考えることができました。

酪農学園大学附属
とわの森三愛高等学校　李 青陽

雪の森
君と紡いだ
青春を
今も思えば
心は白く

李青陽

立命館慶祥中学校・高等学校　孫 瀾歌

為飛ばぬ
白如の日に
風渡る
枯れた木上で
蹴雪鳴る

孫瀾歌

埼玉県立蕨高等学校　劉 斯恬

みずあそび
ひかる太陽が
水しぶき
身に受けとめる
母のように

劉斯恬

東京学芸大学附属国際中等教育学校　王 嘉隆

寒し海
桜舞い踊る
海の上
早咲きの花が
春を告げてる

王嘉隆

桜丘高等学校　董 易文

雪解けの
朝日が映える
谷の間に
新しき風
草芽吹く青

董易文

聖カタリナ学園
光ヶ丘女子高等学校　王 子芸

池の花
花刹なく咲かす
青春は
刹那を過ぎる
貴重な日々だ

王子芸

活水高等学校　翁 月瑩

あの夏に
潮風かおる
水辺の森
上げ潮になる
繋いだ心

翁月瑩

岩田中学校・高等学校　沈 瑞麟

霧湧散る
斜陽を映す
笑顔にも
星屑みたい
記憶に残る

沈瑞麟

神村学園高等部　朱 語晨

霧れた午
梅雨の薫りと
わが心
連れていたのは
ツルオの響き

朱語晨

**楽しい時期も辛い時期も、一番近くで励まし、そして助けてくれたのは
受入校の先生方、友達、ホストファミリーの方々でした。
1年間お世話になったみなさまから、第 15 期生受入れのご感想をお寄せいただきました。**

受入校

劉さんとの思い出

劉斯恬さん受入校 埼玉県立蕨高等学校　教諭　**増田 美沙** 先生

劉さんと初めて会った時のことを今でもよく覚えています。緊張しながらも、にこっと笑顔で挨拶をしてくれました。受入式とオリエンテーションの中で、劉さんは教職員の声によく耳を傾け、これから始まる留学生活に期待を膨らませながら、積極的に理解しようとする姿勢がありました。登校初日の全校生徒へ向けて挨拶する場面ではとても流暢に、きれいな日本語で話すので、皆感動していました。私自身も劉さんと仲良くなって多くのことを学びたいと強く感じたものです。

蕨高校では留学生との交流事業を国際交流部で企画・実施しております。今年度は6月11日(火)の午後に、劉さんとオーストリアからの留学生との交流会を開催しました。第一部では、中国の歴史・文化、学校生活のことを日本語で発表。中国のお正月や数多くの民族衣装、私たちにとっては驚きの学校のカリキュラムやルール、同世代の流行や価値観など、ユーモアを交えてわかりやすく紹介してくれたおかげで、参加者は文化の違いを理解し充分に楽しむことができました。話題選びのセンスの良さが光っていました。

この交流会の準備もそうでしたが、劉さんは何事にも全力で取り組みます。劉さんの並々ならぬ努力に担任教諭も尊敬の念を抱くほどです。学習面だけでなく、人となりも素晴らしいです。謙虚で優しく、いつも周囲への感謝を忘れず、その気持ちを言葉と行動で伝えてくれます。これからも日本の友人との繋がりを大切に、多くの人に愛されながら活躍されますことを心から願っております。生徒たちに良い影響を与えてくれて本当に有り難うございました。日本での再会を楽しみにしております。

保護者

番外編:15 期生を送り出して (中国の保護者に聞きました)

1.このプログラムに参加して、お子さんは成長したと思いますか?

成長した
100%

● どのように成長しましたか?

- 性格が明るくなった。
- 生活力がついて、自分のことを自分で出来るようになった。
- 人とコミュニケーションをとることが好きになった。
- 人に丁寧に接し、感謝の気持ちを持つようになった。
- 学習面で目標が明確になり、大変でも勉強を頑張るようになった。
- 自分に自信を持つようになった。

友達　瑞麟、ありがとう。

沈瑞麟さん受入校　岩田中学校・高等学校　申 秀謙 さん

僕は小さな頃から父の仕事の関係上、中国人や韓国人の海外の方と接する機会が多々ありました。そのような今までの経験もあってか、初め中国から留学生が来ると聞いて自分が色々なことを教えてあげようと、僕は張り切っていました。しかし、いざ瑞麟が来て話してみると、最初から日本語は上手で英語もできて、驚きが隠せなかったのを覚えています。そして、最初から瑞麟が日本語を話せたこともあってか瑞麟はすぐにクラスの一員になっていきました。すると、瑞麟と過ごして少し経った頃、僕等に新しいニュースが来ました。その内容はカンボジアからもう1人留学生が来るということです。彼の名前はロティ、僕と瑞麟の仲を話す上で欠かせない存在です。ロティを迎えての学校生活はとても賑やかでした。2人も僕も寮生ということもあって過ごした時間は長く、とても濃いものでした。寮では決められた決まりの中でできる最大限のことをして遊び、一緒にサッカーを見たり、最後帰国する際には寮生でお別れ会をしました。瑞麟とのたくさんの思い出の中で特に印象深いのはみんなで僕の家にホームステイをしたことです。僕の家族と一緒にご飯を食べに行ったり、一緒にゲームをしたり、お城を見に行ったりたくさんのことをしました。また、僕等の学校生活の中で英語を話す機会が多く、瑞麟から僕たちが英語、そして中国語を学び、僕らが日本語を教える、そういった関係でした。そしていつかは自分やクラスメイト、そしてロティも一緒に瑞麟の故郷の瀋陽に行って学校生活の思い出を話し、逆に瑞麟の学校のことも知りたいです。いつまでもずっと連絡を取り合って互いのことを思いやり、助け合う、そんな関係性でいつまでもありたいです。瑞麟、10ヶ月、ありがとう。

友達　翁月瑩さんとの思い出

翁月瑩さん受入校　活水高等学校　II年A組　英語科のみなさん

翁さんは、活水での生活を始めた時から、日本語が上手でした。最初から上手だった日本語は留学が終わるころにはさらに上手になっていて、私たちが普段の会話で使う言葉も使えるようになっていました。また、自分たちと同じスピードで日本語での授業を受けて、すべてきちんと理解していました。定期テストも全部同じように受け、成績も良かったです。中国からの留学生だということを忘れるほどでした。

私たちはお互いに日本語を教えたり、中国語を教えてもらったりしました。英語も教えてもらいました。長崎の町を案内した時はたくさん質問してくれましたし、中国のこともたくさん教えてくれました。中国の文化も知ることができて、お互いの文化に触れることができました。部活動の弓道部や様々な行事を通して、上級生とも仲良くなっていました。

翁さんは寮に住んで、身の回りのことは自分でやっていました。慣れない土地での生活は大変だったと思いますが、全てのことをやり遂げて尊敬しています。一年間外国に留学しようという勇気があって、自分にはそんなことはできないと思いました。どんな事もとても頑張っていました。

翁さんと過ごした10か月間はとても濃く、楽しかったです。たくさんおしゃべりもできて、良い思い出がたくさんできました。活水に来てくれて本当に良かったです。

友達　また会おう、王君

王嘉隆さん受入校　東京学芸大学附属国際中等教育学校　土屋 颯亜布 さん

約9ヶ月間の留学生活を送った王君は、TGUISSという個性の溢れた学校自体や彼自身の日本語の上手さ、彼との日々の思い出により、留学生という特別な一人というより、今でも僕達と変わらない学年の仲間の一人である。

僕自身も幼い頃に、知り合いもいない、言語すら話せないドイツに引っ越しをしたことがあり、現地の学校生活に苦しみ、最初の頃は毎日涙を流していた。

王君には最初は楽しみという気持ちが緊張と共に見えたが、時間につれて日本語で行われた授業の難しさやホームシックなどが沸き起き、昔の自分が見えたようであった。僕にはその頃家族という存在がいたが、彼には誰もいなかった。

ちょうどその頃、家の近くでお祭りが行われていたので、王君を誘った。他の友達も何人か誘った。僕にとって「誘う」ことは簡単なことだった。ただ王君にとってはとても嬉しいことであったのだろう。お祭りの後、みんなでご飯を食べに行き、その後も何十回とご飯を食べに行き、海や山にも一緒に行った。王君は僕の家に泊まりにも来た。中国に帰った今でも、彼から荷物が送られてきたり、WeChatで話したりしている仲である。

遊んでばかりに聞こえるが、日本語の勉強に加えて学校の期末テストや模試、英語だけでなくフランス語にまで取り組んでいた姿が尊敬できるところであった。

王君が来てくれて、彼に日本の文化・日本人がどんな人なのかを教えたのではなく、一人ひとりが人として違う人であり、王君と僕達が違うのではなく、王君も含めみんなが違った人であると理解を深めることができた。

保護者　番外編:15期生を送り出して（中国の保護者に聞きました）

2.このプログラムを周囲の人に勧めますか？

勧めます
100%

● 理由

- 視野を拡げられるから。
- 子供の自立性を高めるよいトレーニングになる。
- 国際的な視野を持てる。
- 日本で生活し、豊かな経験ができる。
- あらゆる面で子供が成長できる。

友達

文ちゃんとの思い出

董易文さん受入校　桜丘高等学校　鬮目 珠鈴 さん

桜丘高校に留学してきた董易文さんは、みんなから親しみを込めて「文ちゃん」と呼ばれています。

和太鼓部に入部した文ちゃんですが、休日の依頼演奏に参加するための移動手段がなく、私の母の車で一緒に移動することになりました。これがキッカケで話す機会が増え、公演のたびに一緒に移動していたので、私と同じくらい、私の母とも仲良くなりました。 文ちゃんとは10ヶ月もの間、部活動を共にし、県大会にも出場しました。ここでは語り尽くせないほど、沢山の思い出があります。

そんな中、年末年始のホームステイを打診され、家族みんなで歓迎しました。約1週間という短い期間でしたが、忘年会、新年会、初日の出や初詣など、季節にちなんだ行事を詰め込んで、とても楽しく忙しい日々を過ごしました。特にたこ焼きパーティーは文ちゃんがとても気に入ってくれて、たこ焼き器の購入を検討するほどでした。

文ちゃんに日本文化を体験してもらいながら、私も中国の文化を沢山教えてもらいました。異文化交流、国際交流と表せるような素敵な体験であり、発見と驚きの1週間でした。

交流中に一番驚いたことは、擬音語が通じないことです。分かりやすいはずが、逆に伝わらないことが何度もありました。繰り返し使っていたので、今では結構通じるようになって嬉しいです。また、三河は方言が特徴的な地域であり、最初は通じなかったものも、文ちゃんが使いこなせるほどになりました。

ホームステイ終了後も、映画館やカラオケなどに遊びに行きました。どれも大切な思い出です。私はこの10ヶ月で、一生の友を得ることが出来ました。文ちゃんが選んだ部活が和太鼓部でよかったです。

再見！また会いましょう！

心連心サポーターからのメッセージ

第15期生から「心連心サポーター」制度を導入して、心連心の卒業生たちに自らの経験を生かし、招へい生たちの留学生活への適応や、進路の相談を受けるなどのサポートをお願いしました。毎月オンラインで15期生と面談をしたり、対面の研修に一緒に参加しました。

サポーター

第12期生：心連心サポーター
趙 一青

中秋の名月に彩られた15期生の旅立ちは、翌年7月の猛暑のある日に幕を閉じました。先生方やゲストに囲まれた主役たちはいつもの顔ぶれでしたが、気づけばホールに飾られた横断幕は、歓迎会から送別会へと変わっていました。たくさんの未知を前にして緊張と期待で目を輝かせていた高校生たちは、今では穏やかに、少し寂しげに、そして何よりも余裕を持ってはしゃいでいました。その光景を見て、きっとこの1年は15期生たちにとって、他人と触れ合い、違いを受け入れ、世界を知り、そして自分を見つめ直す旅になったのだと確信しました。皆さんの成長はオンライン面談の際、画面越しの私には気づかないほど、少しずつ進んでいたようです。大学を卒業する手前の私にとって、高校生たちの喜怒哀楽はまるで遠い昔の出来事のように映りますが、気がつけば一緒に悩んだり笑ったりする自分がいました。

これからこの日々を思い返すたびに、15期生の皆さんが、新たな旅路へと羽ばたいていけると信じています。

サポーター

第12期生：心連心サポーター
尹 一茜

15期生の皆さんは一人一人が個性的で、毎月の面談がとても楽しみでした。日本に来たばかりの頃は、学業や友達作りに悩むこともあったでしょう。私たちサポーターに打ち明けていない部分もあったかもしれませんが、皆さんがそれぞれの目標をしっかり持ち、現状を把握し、課題解決に向けて努力を尽くしたと感じました。留学を通じて、日本語の上達だけでなく、日本と中国の文化や社会に対する理解も深め、自分はどんな特質を持っているか、将来どんなことをしたいかについても、深く考えたのではないでしょうか。私自身も皆さんの留学生活を見守る中で、自分の心連心時代を思い出して、懐かしく覚えつつ、改めて多くの感想を抱きました。サポーターとして、皆さんの悩みを少しでも解消できるようと目標を設定しましたが、結果的に私自身も皆さんと共に成長できたと感じています。可愛い後輩が出来て嬉しかったです。この10ヶ月間、本当にありがとうございました。

サポーター

第14期生：心連心サポーター
王 籽陸

オンライン上で初めてみんなと出会った時、友達になれるか、適切なアドバイスができるかなど、様々な不安がありました。しかし、みんなの可愛らしい笑顔に接し、その不安は自然と和らいでいきました。その後の毎月の面談では、みんなが興味深い体験をたくさん共有してくれたおかげで、毎回楽しい1時間を過ごすことができました。最後の別れの時、皆さんとの絆の深さを実感し、心から離れがたい気持ちになりました。

正直に言えば、心連心サポーターとして初めて活動を始めた時、私は先輩として十分なアドバイスができるか不安でした。しかし、その心配は余計でした。15期のみんなは、驚くほど大人びていて自立心のある生徒たちだったからです。新しい環境に対する勇敢さ、学業と余暇のバランスの取り方は本当に素晴らしく、高校生とは思えないほどの成熟さを見せていました。むしろ、私の方がみんなから多くのことを学ばせてもらいました。

能遇见你们真的很幸运！またいつか会いましょう！

サポーター

第14期生：心連心サポーター
王 小禾

15期生はみんな優秀な後輩だが、全員の明るい性格、そして仲の良さが特に印象に残った。彼らと一緒にいると、不思議に楽しい雰囲気に染まり、自分も元気になれた気がする。自分たちの留学時では先生に相談し難い悩みもあったことから、後輩の支えになりたいという思いでサポーターになったが、面談担当した四人はみんな前向きで、自分なりの問題対応力があり驚いた。李さんは大人しく、友達ができるか心配だといつも言っていたが、その優しい心で学校のみなさんとも北海道の大自然とも仲良くなれ、有意義な留学生活を送った。劉さんは真面目で、勉強でも人間関係でも自分に厳しいことで辛い時期もあったが、それを見事にクリアし、充実した一年でいい友達もできて感心した。主担当ではなかったが、何事でも明るく前向きな王さん、そして成績もファッションも優秀な孫さんも、私にとって自慢な後輩だった。

これからも15期生のみなさんの活躍を楽しみにしている。また日本に来るときぜひ会おう！

心連心ウェブサイト

日中両言語対応

https://xinlianxin.jpf.go.jp/

国際交流基金では、日本と中国の将来を担う若者たちが心と心を結び合う“心連心”をテーマに、「高校生長期招へい事業」「日中高校生対話・協働プログラム」「中国ふれあいの場事業」「ネットワーク強化事業」を実施しています。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

心連心webサイト

発行　独立行政法人国際交流基金

〒160-0004 東京都新宿区四谷1-6-4 四谷クルーセ　TEL：03-5369-6074

2024年12月発行

心連心
Heart to Heart

JAPANFOUNDATION
国際交流基金

Green Power
ミックス
紙 | 責任ある森林管理を支えています
FSC® C009249